

「家の中に他人が入っていくことについて」

何かあったときの責任の問題があるというご指摘がありました。犯罪についてもご意見がありました。一方で、アメリカに住んでいた経験のある方からは、アメリカではベビーシッターとして高校生がアルバイトで働いているという話を書いてくださっている方もいらっしゃいました。そのあたりが社会の、そして意識の違いかなとも思いました。家族の中でも虐待やDVなど犯罪は起きています。私的関係だから犯罪は起きないのでしょうか？外から入ってくることで起きる犯罪もあるでしょうし、誰も入ってこない閉鎖的な環境だから起こる犯罪もあります。どちらがいいのか、といわれると困りますね。どちらにおいても犯罪はなくさなくてはならないと思います。ただ、どちらもあるということを考える必要はあると思います。

家庭に人が入ってくことで障害児のケアという課題だけでなく、児童虐待も解決するのでは、というご意見もいただきました。そうですね。私もギリギリ経験しているかいけないかの年代ですが、子どもが友だちの家でご飯を食べて帰ってくる、というようなことがあちこちでできていた時代、もちろん虐待はありましたが、誰か助けてくれる人も近くにいたようにも思います。いまは家庭がとても閉鎖的ですね。誰かに頼ること、家族以外の人に頼ることができるようになって変わってくるのかなと思います。以前「受援力」なんて言葉でも表現されたことがあります。頼ることが気軽にできるようになると楽になるのかなと思います。

「マイノリティでよかったについて」

私も最近知ったことですが、サラ・アーメッドという人が「ハンマーの類似性」という概念を紹介しています。ハンマーで打ちのめされた経験はその経験がない人にはわからない。でも同じハンマーで打たれたのではなくても、違うハンマーで打たれたとしても、打たれた経験はある。その痛みを想像することができる。ハンマーの同一性ではなく、類似性から連帯が始まるといいます。

私は障害のある友人たちが受けてきた差別は経験したことはありません。だから障害者差別はわからないです。でも差別された時に感じた理不尽な思いは経験している。そこからどれだけのつらさや大変さを経験しているのだろうと、思いをはせることはできる。そして連帯していきたいと思っています。こう書くとマイナスイメージが強化されますが、もちろん、障害のある人がいることで豊かになる人間関係や喜び、楽しみといったことも大事なことです。ほんとにおもしろい人もたくさんいます。

わたしがマイノリティ性に気づくことができたのは、自分が外される側にいる経験をしたことからでしょう。女性であるということ、日本人であるということ、若い時は若いということ。人に軽んじられた経験です。そのハンマーは誰かと比べられないけれど、あるいはハンマーというほど大きなものではなく、徐々にのしかかってくるようなものでもあったかもしれない。でもその経験があることで他者のマイノリティ性を理解しようという気持ちが育まれたと思います。ただこれでいいというものでもないで、常に気をつけながら、いつ自分が差別する側に(知らないうちに)回ってしまわないか、注意深くあらねばと思っています。

皆さんはきっと「頭がよい」ことでのマイノリティ性を経験しているのではないかなと思ったりします。日本では頭がいいことが、時にはクラスのいじめの原因になったりしますから。特に東大の女子学生の中には東大生であることでの生きづらさを経験している人もいるのではないかと思います。

「私は当事者じゃないですが…」

とあいさつしたことについてもご質問がありました。先述のように私は同じハンマーで打たれたことはないのです。だから当事者の方たちへのリスペクトがあります。自分のことではない、たくさんの人たちとの出会いの中で教えてもらったことを今、皆さんに披露しています。その点で「当事者じゃないですけど」お伝えします、というような意味で使いました。

「障害のある身内の方との接し方に迷いがある」

という方からの相談がありました。身内ではない障害者の方と出会ってみたらどうでしょうか。もしかしたら、違う見方ができるようになるかもしれません。人間の出会いに一方向はないです。必ず受け取るものがあり、与えるものがあると思います。そのことに気づくともう少し自然に関われるようになるのではないかと思います。

「知的障害のある人と、“頭の悪い人”の違い 成果の違い」

難しいですね。頭のいい人でも悪い人はいますね(笑)。知的障害のある人は純粋だという人もいますが、でも性格の悪い人もいますし…いろいろですね。知的障害という一つの特徴で人のあれこれを判断しないということでしょうか。日本人だからとか、男だからとか女だからとか、それだけで評価されるのはとても理不尽だと思います。その人を見るということかと。

評価の話も書いてくださっていて、それぞれの努力と絶対評価と相対評価という問題とそこに市場が絡んでいると思います。評価するのは誰で、どう評価されるのか…こちらがコントロールできないこともあります。そのへんは経済の皆さんの方がご専門だと思うので、ぜひいろいろ教えてください。

自分が「境界線をぼやかすためにやっていること」

2014年から2020年まで、PTAで一緒だったママたちと1ヶ月に一度自宅を開放して(途中から場所を借りて)、酵素玄米のおにぎりを作って食べながら話したりする会をやっていました。ママ友の中に助産師さんがいて、新生児と母親を支える活動をやりたいね、と数名で始めました。そのうち徐々に人も増えていったのですが、コロナになってストップ、その後オンラインでやったりもしましたが、おにぎりを食べる、みそ汁を飲むということが真ん中であってそこで話すことが大事な会だったので、オンラインになってしばらくして止めてしまいました。でもその時に知り合ったママから時々お子さんを預かっています。自分の子育てがあと少しで節目を迎えるので、その後には週末里親や思いがけない妊娠をした若年妊婦さんの宿泊などの活動を開始したいと思っています。

また社会人～二度目の大学生～大学院生の時にボランティア→ら重度訪問介護のヘルパー、コーディネーターを長くやっていました。それが原点です。

自分の子育ての時、保育園、親、ファミリーサポートと助けてもらいましたが、そこどまりで、なかなか関係を広げられなかったようにも思います。私も夫もジョブ型の働き方をしていたので、割とフレキシブルに子どもの状況に合わせることができたという点もあったと思います。もう少し緩やかにハードル低く手助けし合える関係をあちこちで作ることができるといいなあと思っています。

「知的障害のある方がもし「不幸」と感じている状況なら、それはそのように生まれたこと自体によるものではなく、知的な面で人々を評価する社会によるものなのかなと思った。」という感想をいただきました。障害の社会モデルの考え方を理解してくださっていること、とてもうれしかったです。

たくさんのご質問、感想、ありがとうございました。上手くこたえられていないところもあると思いますので、質問やご意見があれば、メールを送ってください。

etanaka@tokyo-kasei.ac.jp

田中恵美子